日本文化の特質としての柔らかな開放性

― 西洋哲学の受容と近代教育の目的 ―

平　田　俊　博
（山形大学大学院教育実践研究科）

本稿のねらいは,「哲学」と「人格」という２個の現代日本語の成立過程の分析を通じて,日本文化の特質が「柔らかな開放性」であることを明らかにすることです。第１節「日本語の多層性―７層性と５層性―」において,日本語の開放性について全般的に考察します。第２節「『理学』からの脱却と『哲学』概念の創出―西周と近代文明―」においては日本語の異文化への開放性と未来開放性について考察します。第３節「『人格』概念の創出と近代日本―現代日本の教育理念―」では,「人格の完成」という日本の教育の目的と近代日本におけるカント哲学の導入の緊密な関係を明らかにします。

［キーワード］　日本文化,　柔らかな開放性,　日本語の多層性,　哲学概念,　人格概念

はじめに

日本はユーラシア大陸の東南端に位置する小さな島国です。日本列島は２，3 万年前に地理的に形成されて以来，グローバルな自然環境の大変動やユーラシア大陸の政治的動乱にたびたび見舞われてきました。その間，周辺地域の多様な住民が何波にもわたって日本列島に移住し，ほぼ 1500 年前に現在の日本人と日本文化の祖型がかたちづくられるに至りました。日本が人種的にも文化的にも「雑種的」と言われる所以です。日本は地理的，歴史的に東洋のイギリスと呼ばれることがありますが，人種的，文化的には近代のアメリカ合衆国に近いと言えましょう。

ところが，約 150 年前に欧米の列強の東漸と武力による植民地化の危機に直面して，日本列島全体に民族意識が勃興しました。そして日本民族の統一と団結と独立のために，日本人が純粋な単一民族であり日本語が統一的な共通語として独自の言語体系を持つことが強く要請されました。それまでは日本住民のほとんどにとって国とは居住する藩が基本単位であって，その御国である藩のために命を捧げ，時として隣藩である隣国との一戦をも辞さないことが美徳とされていました。

日本人単一民族説と日本語独自説は事実問題というより，欧米列強に対する政治的アピールであり，むしろ歴史イデオロギーとして機能したと言うべきでありましょう。しかし第２次世界大戦の無条件降伏以後，日本人は謙虚さと冷静さを取り戻して，自らの文化と歴史を科学的に検証してきました。そこで私は本稿で，日本文化の特質が「柔らかな開放性」にあることを示したいと存じます。

まず開放性について申しますと，これには二つの意義があります。第一義は異文化への開放性です。これは日本が中国文明圏の最外周の周辺国として，より高度で強力な周囲の国々の脅威に常に曝されてきたという地理的かつ歴史的理由によるものです。日本は国の存続のために，常時アンテナを高く張って海外の最新情報を貪欲に摂取消化し続けざるをえなかったのであります。

開放性の第二義は未来への開放性であります。異文化開放性の結果，日本では固定的な核文化が形成されにくく，むしろ最新最強の異文化を基準として伝来の自文化をそのつど柔軟に組み替えて，未来に向けて新たに文化を創成し続けていくことが不可避だったのです。

次いで「柔らかさ」ですが，これは今述べた未来開放性から直ちに生起する性格です。ただし，柔らかさは単なる軟らかさとは異なります。「軟らかさ」が軟弱かつ没主体的で容易に溶解してしまうのに対して,「柔らかさ」は外柔内剛で芯があり一貫した主体性を維持しようとします。海外事情に振り回されるだけの「軟らかな開放性」ではなく，したたかに自主性を追い求めるのが「柔らかな開放性」なのです。

さて，本稿で私は「柔らかな開放性」という日

本文化の特質を，現代日本語の具体的な分析を通じて以下の順に明らかにしていきたいと存じます。
第１節，日本語の多層性―７層性と５層性―
第２節，「理学」からの脱却と「哲学」概念の創出―西周と近代文明―
第３節，「人格」概念の創出と近代日本―現代日本の教育理念―

第１節では日本語の開放性について全般的に考察します。第２節では日本における西洋哲学の受容の経緯に着目します。そして，なぜ日本人は伝統的な理学から脱却しようとしたのか，その理由を解明することで，日本語の未来開放性について論じます。第３節では，「人格の完成」という日本の教育の目的と近代日本におけるカント哲学の導入の緊密な関係を解明しつつ，日本語と日本文化の柔らかな開放性について考究します。

１　日本語の多層性―７層性と５層性―

日本語の開放性全般を考察する本節では，日本語の多層性について明らかにします[1)]。

[1-1 日本語とは何か]

比較文学者の平川祐弘によりますと，目に訴える表意文字である漢字と，耳に訴える表音文字である仮名を混ぜて用いるのが，混淆語 mixed language としての日本語の大特色であります[2)]。このせいで日本語は外来文明を受け入れやすいのです。その典型がパソコンなど，片仮名で埋め尽くされたＩＴ（情報技術）用語です。

また国語学者の高島俊男によれば，日本語は概ね以下の４種の語群より成ります[3)]。

１，［和語］　やまとことば。ひらがな表記。
２，［字音語］　漢語と和製漢語。和語と字音語で2000年頃の日本語の約85%。
３，［外来語］　漢語を除く外来語，および和製洋語。パソコン，マイカーなど片仮名表記が多い。増える一方で2000年頃の日本語の語彙の約10%。
４，［混種語］　以上３種の２つ以上が混ざるまぜこぜ語。和漢混種語（台所，気持，場所，買春，等）や和漢外混種語（輪ゴム，食パン，サボる，ナウい，等）など2000年頃の日本語の約５%。

さらに書家の石川九楊は，「日本語は書字中心言語」であると主張します[4)]。書字行為の観点から見れば，日本語は三種類の言葉が複雑に入り組んだ二重性言語なのです。三種類とは，漢語流入以前の無文字時代の種々雑多な前日本語と，漢語の語彙と，漢語流入後に漢語に対応するべく新造された和語を指します。平仮名による和歌を通して，漢語の和語化と和語の漢語化という複線訓練が進行し，日本語が世界に稀有な「音訓複線言語」として組織されたのであります。

日本語を二重言語構造とするか三重言語構造とするか，という点で，石川理論には小さな揺らぎが内在します。片仮名の正書法が現在なお未確立なので，書字史観に立てば，漢字＝漢語と平仮名＝和語の二重言語構造だと言わざるをえないが，それでも片仮名＝西欧語の事実を無視できないからです。

しかし，石川も認める通り日本文化の特殊性は，漢字と平仮名と片仮名の三種類の文字をもつ特異さにあります。その意味で日本は，むしろ三重言語国家と言うべきなのです。そうしてこそ日本語と日本文化の歴史的独自性が明白となります。二重言語国家と言うならば，ハングルと漢字を併用してきた韓国にも当てはまるからです。

[1-2　日本語と日本文化の多層性]

倫理学者の和辻哲郎は『続日本精神史研究』の中の論考「日本精神」において，「日本文化の重層性」を力説し，「日本文化の一つの特性は，さまざまの契機が層位的に重なっているということに存する」と述べています[5)]。しかも，各層は並在（Nebeneinander）するのです。いずれかの層が上位にあって，他の層を過去の残滓に過ぎないとして克服し捨て去ることが決してないのです。和辻は，次のように言います。

「日本文化においては，層位を異にするさまざまなものが決してその生くべき権利を失っているのではない。超克せられたものをも超克せられたものとして生かして行くのが日本文化の一つの顕著な特性である。日本人ほど敏感に新しいものを取り入れる民族は他にないとともに，また日本人ほど忠実に古いものを保存する民族も他にはないであろう。」（同）

このように和辻は日本文化の並在的な重層性について語りますが，それでいて日本語の重層性に関しては必ずしも積極的に明言していません。『続日本精神史研究』中の論考「日本語と哲学の問題」において和辻の念頭にある日本語は，基本的に，彼の言う「純粋の日本語」，つまり和語（や

まと言葉）のみです。

和語以外に，伝来の中国漢語（儒教・仏教漢語）から「日本語化した漢語」と，明治期に新しく造語された欧米語からの翻訳漢語（近代漢語）である「新しき日本語」（同）とについても言及しますが，和辻にとって，これらの漢語は，「特殊な種として特別の区域に囲い込んで」おかれた「学問的用語」に止まります。これに対して，和語は「日常語及び文芸語」であって，「無反省なる自然的思惟を……常により強き情意の表現とからみ合あわせるごときもの」なのです。こうした和辻の日本語観は重層的とか多層的とかよりは，むしろ並在的なものにすぎず，次のように整理できるでしょう。

［和辻哲郎による日本語の３分類］：

[A]純粋の日本語：

①和語（やまと言葉）。②日常語及び文芸語。③知識的反省以前の体験を表示する表現。④直接なる実践行動の立場における存在の了解の表現。⑤「日常語」は学的概念に縁遠く芸術的表現に親近なる言葉。⑥言語の純粋な姿を比較的に素朴なままで保つ。

[B]日本語化した漢語：

①中国伝来の漢語。②仏教や儒教のすでに高度に発達せる概念的知識。③学問的用語。④論理的な概念内容を表示する語。⑤日本人の思想の機関。

[C]新しき日本語：

①近代漢語（明治期に新しく造語された欧米語からの翻訳漢語）。②日本語化した漢語の新しい組み合わせによって，漢語としての伝統を振り払った「言語上の革命」で成立した「新造語」。③ヨーロッパの学問の伝統をそのまま受け入れ得る学問的用語。④初めより概念内容を表示するものとして現れてくる。⑤民族の体験に根ざした「意味」を担うことが少ない。

以上のように，日本語に関する和辻の指摘はまだ直観的で，抽象的な域を出ません。ただ，彼の次のような言語観には留意しておく必要があります。「それぞれの特殊な言語を離れて一般的言語などというものがどこにも存しない」。「言語のごとき具体的な生の表現は精神史的な理解なしに取り扱われ得ない」。和辻も実存哲学者ハイデガーと同様に，「言語の構造は国民の精神的特性そのもの」としたドイツの言語哲学者ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語観を継承しているのです。

ところで，民族学者の佐々木高明によれば，日本の基層文化の形成には四つの大きな画期があります[6]。[第一の画期]は，今から約一万二千年前に成立した縄文文化であり，東北アジアのナラ林帯（落葉広葉樹林帯）の食料採集民の文化と言語（原東北アジア語）を基盤とします。[第二の画期]は，今から約５千年前に西日本に展開した照葉樹林文化であり，東南アジアの焼畑文化や言語（オストロネシア系原語やチベット・ビルマ系言語）が伝来して，日本列島の一部で言語のクレオール化（言語混合）が進行しました。[第三の画期]は，今から約 2400 年前に成立し始めた弥生文化であり，朝鮮半島から新モンゴロイドの人々が渡来して，水田稲作文化や金属器文化と共に，アルタイ系の言語を伝来しました。さらに，この頃，中国南部や南島系の言語も伝来して，混合語としての日本語の根幹が形成されました。最後に[第四の画期]は，今から約 1600 年まえに成立した古墳文化であり，朝鮮半島から支配者文化が渡来して日本の民族文化の基層が完成し，上代日本語が形成されるに至りました。

このように日本文化は多元的な起源を有する，と佐々木は言います。系統や系譜の全く異なる諸文化が蓄積され多重な構造を形成しながら，日本文化の基層を成すのです。異質で多様な諸文化を容易に受け入れ，しかも，それらを次第に統合していくプロセスにおいて，全く独自の文化的特色を創造する日本文化の特徴を，佐々木は「受容・集積型」の文化と名づけます。多様な文化にさまざまな形で対応できる柔軟性をもつのが，受容・集積型文化の特徴です。それゆえ，多元的で多重構造の日本文化は，21 世紀のグローバルな多民族多文明の時代に容易に適応できるはずだ，と佐々木は提言します。

さて，それで四つの画期から成る日本民族の基層文化のうちでも，日本文化の形成に最も大きな影響を与えたのが第三画期の水田稲作文化だった，と佐々木は言います。縄文時代の末期に中国大陸からやってきた水田稲作農耕は，金属器文化などのハードウェアと共に，宗教的世界観や社会的統合原理などのソフトウェアをも，新たに東海の弧島列島日本に持ち込むことで，日本文化の形成に重大な影響を与えたのです。したがって，その後の日本文化の形成史は稲作文化と非稲作文化の相克の歴史となりました。

佐々木によれば，日本文化は表面的には，稲作文化に収斂する傾向が強かったのですが，それでいて，簡単に吸収，同化されてしまうほど非稲作文化がひ弱だったわけではありません。例えば第二画期の照葉樹林文化に由来する文化要素が，今日でも日本文化の伝統の中に広く認められることを佐々木は指摘します。具体的には餅や納豆，麹酒，そして茶，あるいは山の神信仰や山上他界観などです。こうした非稲作文化の伝統こそが，「日本の文化の基層に分厚く堆積して，多重で柔軟な構造をもつ日本文化の特色を形成するための，もっとも重要な基礎条件」を作り出しているのです。

ここで，佐々木説を整理して哲学的に理論化してみれば，次のようになりましょう。

[A]　日本文化の裏基層＝非稲作文化：

a) 日本文化の底基層＝縄文採集文化

b) 日本文化の下基層＝東南アジア焼畑文化（西日本）

[B]　日本文化の表基層＝稲作文化：

c) 日本文化の中基層＝弥生水田文化

d) 日本文化の上基層＝上代日本語古墳文化

つまり，日本の基層文化は，表の稲作文化と裏の非稲作文化の二双に大別でき，さらに，それぞれが上と下に細別できて，つごう四重の層へと区分けできます。だが，それでいながら，これら二双四重の各層が行儀良く整然と上下に分離できるわけではなくて，それぞれが自律的システムを貫徹しながら，二双の層全体としても，あるいは，四重の層全体としても，宛ら糾える縄の如くに調和します。「るつぼ型」のように，何でも彼でも原型を留めぬまでに熔融するのではありません。と言って，「サラダボウル型」にように，雑然と混在に任せるわけでもないのです。二双四重がそれぞれに首尾一貫しながら，時と場所に応じて所在を変じて，あるいは表となり裏となり，あるいは上となり下となって，斑状に表面に占める位置と量を競い合う――こうした「糾える縄型システム」が，受容集積型の日本文化の多重構造を特徴づけている，と私は言いたいのです。

多元的とは言っても，るつぼ型でもサラダボウル型でもない二双四重の柔構造が，日本文化独特の「糾える縄型システム」なのです。しかも，この柔らかなシステムは，佐々木説の射程をも越えることができます。つまり，二双四重の層構造の上と下に，さらに，しなやかに別の層を受容し，かつ集積できるのです。それゆえ，私は佐々木の日本文化多重構造論を発展的に継承して，日本哲学の立場から，新たに日本文化多重柔構造論を提唱したいのです。こうすることで日本文化が，なぜ受容・集積型文化なのか，なぜ多様な文化にさまざまな形で対応できる柔軟性をもつのか，要するに，なぜ日本文化の特質が「柔らかな開放性」にあるのか，を哲学的に解明してみたいのです。

[1-3　日本語の7層性]

私は日本語には次の7層があると考えています。

(0) 根底層：話し言葉；母語，地域方言

(1) 基層層：ひらがな文字；やまと言葉(和語)；近代共通語：教科書語，テレビ語

(2) 下層：漢字；儒教漢語

(3) 中層：漢字；仏教漢語

(4) 表層：漢字；近代漢語

(5) 最表層：カタカナ文字；外来語，情報技術用語

(6) 外層：外装文字；アルファベット，アラビア数字，ローマ字，絵文字，等々

さて，佐々木の日本文化多重構造論を私の日本語論に照らしてみれば，最下層の根底語に対応するのが，第一画期の縄文文化と，西日本に展開した第二画期の照葉樹林文化です。そして第二層の基層語である和語(やまと言葉)に対応するのは，第三画期の弥生文化です。また第四画期の古墳文化は，下層語の儒教漢語に対応します。『古事記』や『日本書紀』によれば，この頃に朝鮮半島南西部に栄えた百済から，漢の高祖の後裔と言われる王仁（和邇吉師）によって「論語」10巻と「千字文」1巻がもたらされました。本格的な文字文化の開始です[7]。文字と文法の導入に伴って，政治的共同体としての原日本の骨格が定まり，上代日本語が形成されていきました。これに比べると，根底語はもとより，日本語の根幹ともされる基層語の和語もまた，統一的国家成立以前の前日本語に止まります。未だ日本が実態的に日本として成立していないという事情に加えて，当時の使用語がなお話し言葉の段階を越えず，書き言葉の段階に至っていないからです。

原日本語は儒教漢語と前日本語とから成る，と私は考えています。書き言葉である漢字と，話し言葉である前日本語との二本立てなのです。それが，音・訓という独特な文字の読み方に結びついていったのです。したがって日本語は，その成立

からして構造的に二種の語源をもちます。漢語としての語源と前日本語としての語源です。

その後，日本が国家事業として仏教をアジア大陸から導入した奈良時代や平安時代には，仏教漢語が中国から輸入されました。近代に至って幕末から明治前期に近代欧米語が翻訳されて，近代漢語が日本で成立しました。日本では古くよりカタカナが外層の外装文字として，新しい異文化からの外来語を受容する装置でした。そうしたカタカナ語は従来では，やがて漢字の二字熟語が案出されて，次第にこれに置き換えられてきました。近代漢語がその代表例です。ところが 1970 年代以降，情報科学技術の驚異的な進歩とこれに伴う IT 用語の爆発的増大によって，漢字への置き換えが不可能になりつつあります。量的にも質的にも，また加速度的な増大のスピードにもついていけず，その結果いまや，カタカナ語が学術用語としても日常用語としても独自の市民権を得てきた観があります。

［1-4　日本語の５層性］

日本語は基本的に７層構造を有しているというのが私の考えです。けれども，このことは日常の生活用語レベルのことであって，学術用語レベルでは別の様相を呈します。学術的には 1970 年までは日本語は４層構造であり，それ以降は５層構造とすることができます。音訳カタカナ語がカタカナのままで学術概念として認知されてきたのです。その典型例がヒトです。生物分類学ではヒト科のヒトは，人類(人)と類人猿(チンパンジー，ゴリラ，オランウータン)を指します。

さて，和語，儒教漢語，佛教漢語，近代漢語，カタカナ語は，日本語の内部で学術的に層を成して住み分けており，そのせいで，日本語は人間本性の諸相を極めて精緻に，かつ普遍妥当的に分析し記述できると私は考えます。以下で簡略に解説してみましょう。

(1)［和語］やまと言葉。ひらがな表記が基本。日本語の基層語であって，身体生活空間を表現する現象学的用語として適している。

(2)［儒教漢語］漢代までに成立した本来の中国語で，前近代的な公共生活空間を表現する社会学的用語にふさわしい。

(3)［佛教漢語］主に六朝時代に成立した，パーリ語やサンスクリットからの翻訳語で思弁的用語や心理学的用語に向いている。

(4)［近代漢語］明治期以降に欧米語の翻訳語として日本で制作されたもので，近代に成立した自然科学用語や社会科学用語として適合している。

(5)［カタカナ語］外来の情報技術など科学技術用語として頻繁に用いられる。

２　「理学」からの脱却と「哲学」概念の創出
―西周と近代文明―

第２節では日本の近代化と西洋哲学受容の経緯と特徴を，幕末から明治にかけて活躍した哲学者の西周に即して明らかにしたいと存じます。そして，なぜ日本人は伝統的な理学から脱却しようとしたのか，その理由を解明することで，日本語の未来開放性について論じます。

「哲学」という言葉は，幕末から明治初期にかけて欧米語の翻訳語として西によって制作された近代漢語です。近代に日本で成立した翻訳漢語が，なぜ自然科学用語や社会科学用語に適合しているのか，ということの理由を，「哲学」という学術用語が明らかにしてくれます[8)]。

現在の日本語では「哲学」が文科系の学問を指すのに対して，「理学」は理科系の自然科学を意味します。しかし，「哲学」という日本語の歴史は思いのほか浅く，漸く明治時代初期に遡るにすぎません。その意味するところは当時，むしろ「理学」という由緒ある伝統的用語でもって理解されていました。その意味とは，最新の『広辞苑』(第六版 2008 年)の項目「哲学」を参照すれば次のようです。①物事を根本原理から統一的に把握・理解しようとする学問。②俗に，経験などから築き上げた人生観，世界観。また，全体を貫く基本的な考え方・思想。

また，同じく『広辞苑』(第六版)の項目「理学」によれば，「理学」とは，①中国，宋代に唱えられた性理学に始まり，陽明学までを含む宋・明代儒学の総称。②陰陽師などが方位や星象を見て吉凶を定めること。③(明治期の用語)哲学。④㋐自然科学の基礎研究諸分野の称。㋑特に，物理学。→窮理学。

では，近代に至って，なぜ，理学に替えて哲学という用語が新たに必要となったのでしょうか。「哲学」はギリシア語のフィロ・ソフィア(愛・智)の訳語で，幕末期にオランダへ留学した津和野藩脱藩浪士で幕府開成所教授となった西周が，賢哲の明智を希求する意味で案出したものです。宋学

の創始者である中国の儒者，周敦頤の「士希賢」という言葉に着目して，彼はまず「希哲学」と意訳しました(1861 年起草の津田真道の稿本『性理論』に附した西周の跋文)。やがてそれが「哲学」という二字熟語に収斂して，定着して言ったのです。

西は明治３年の『百学連環』の中で，「哲学ヒロソヒーを理学,或は窮理学と名づけ称するあり」と述べています。また，明治６年６月脱稿の『生性発蘊』でも,「理学理論ナド訳スルヲ直訳トスレドモ，他ニ紛ルコト多キ為メニ今哲学ト訳シ東洲ノ儒学に分カツ」と述べます。

さらに西は，明治７年刊行の不朽の名著『百一新論』において，以下のように「哲学」の独自の意義を明確に論じています。「…総ベ論ズル学術ヲ取別ケ物理ノ参考ニ備ヘネバナラヌコトデゴザル,総テ箇様ナコトヲ参考シテ心理ニ徴シ，天道人道ヲ論明シテ,兼テ教ノ方法ヲ立ツルヲヒロソヒー,訳シテ哲学ト名ケ，…百教ヲ概論シテ同一ノ旨ヲ論明セントニハ…哲学上ノ論デハ物理モ心理モ論ゼネバナラヌ事デゴザルガ，兼ネ論ズカラト云ツテ，混同シテ論ジテハナラヌデゴザル。」

『哲学字彙』(初版，明治 14 年)は，日本人最初の哲学科の大学教授である井上哲次郎を中心に編纂された日本最初の哲学用語集です。高給のお雇い外国人教師に替えて，数分の一の俸給額の日本人教授が，日本人学生に日本語で講義できる体制整備の一環が，当時，日本で唯一の大学であった東京大学の諸学科が競って編纂した『…字彙』であり，その一つが『哲学字彙』です。

そこでは，Philosophy は哲学ですが，Ethical philosophy は倫理学，Natural philosophy は物理学，Practical philosophy は実践理学と訳されています。理学もなお健在だったようです。ところが『哲学字彙』(三版，大正元年)では，理学はすべて哲学に置き換えられます。そして Philosophy は哲理，哲学と訳され，哲学は欧州儒学で，東方儒学と区別するために西周が訳した，と説明されています。

明治 20 年 2 月に日本最初の学会である哲学会の機関紙として創刊された『哲学会雑誌』(明治 25 年６月『哲学雑誌』と改称)創刊号(第１冊第１号)において，文部省編輯局雇員兼東京専門学校(後の早稲田大学)講師であった三宅雄二郎は次のように述べています。「ソモソモ哲学ノ語タル，モトフヰロソフヰーノ翻訳ニシテ,明治 10 年４月旧東京大学ノ文学部ニ一科ノ名トシテ使用シタルヨリ，世上一般に流行スルコトト為リタル者ナリ。実ハ理学ト称スルカタ的切ナル可ケレドモ，当時理学ハスデニサイエンスノ訳語ト定マリ居リシテ以テ,強イテ一種独特の訳語ヲ作リ出シタルナリ」(一部表記変更)。

要するに，西周は当時の世界の学問の大勢を明察して，儒教的用語の理学を忌避して，全く新しく哲学の語を創出したのです。しかしながら当時の日本人には，それが十分には理解されなかったようです。

儒教の「理学」では，心理優位で心理と物理を一元的に統合しようとしました。これに対して，ヘーゲル没後の反動で反観念論的思潮が支配的だった当時のヨーロッパの「科学(サイエンス)」では，物理優位で心理と物理を一元的に統合しようとした物活論的(psycophysisch)ないし進化論的思考が優勢でした。

ところが西は，近代物理学を学の基準としながらも物理とは別種の心理的学問の必要を洞察して,両者を基礎づける方法的原理論となるべき全く新しい根本学として,「哲学」を理解していたのです。これは，折りしもドイツを中心として世界中で勃興しつつあった，新カント学派の学問論に正確に対応するものです。

新カント学派の学祖であるカントは，古代ギリシア・ローマのストア学派の学問論を再興して，哲学を論理学と物理学と倫理学に三分しました。これらは今日で言う情報科学（人文科学）と自然科学と社会科学に対応します。西の当時，日本でも東洋でも「倫理学」という用語も学問も存在しませんでした。「倫理学」は東洋では「心理的」学問である性理学の系譜に属するものです。また「論理学」はカントの「超越論的論理学」を淵源とするもので，後年の現象学に継承されて近代ヨーロッパ哲学の本流となりました。

ともかく，西周は当時の欧米で進行中であった科学革命と社会革命の本質と意義を，日本人としては例外的に正確に見抜いていました。「理学」という伝統的概念の系譜の中で,「哲学」を西洋儒学として「東洋と西洋」という対立軸において理解しようとした当時の趨勢に抗して，西は東洋や西洋という枠組みを超克する「近代」へのパラダイム・シフトを「哲学」という用語の創造で果たそ

うとしたのです。「哲学」は日本語の未来開放性を象徴する近代漢語なのです。

３　「人格」概念の創出と近代日本
—現代日本の教育理念—

本節の課題は，「人格の完成」という日本の教育の目的と近代日本におけるカント哲学の導入の緊密な関係を明らかにし，そうすることによって，日本語と日本文化の柔らかな開放性を実証することです。

第二次世界大戦後の日本の教育は 1947 年に公布された教育基本法と，2006 年公布の改正教育基本法に立脚しており，いずれも「人格の完成」を教育の目的だと定めています。そこで，どのようにして人格という思想が日本に成立したのか，また，人格という思想の日本的特徴は何か，という二点を簡潔に見ていきたいと思います。そのために，まず日本における人格概念の成立過程を，次いで日本的な人格の思想がカントの定言命法の英訳的解釈に立脚していたことを示します[9]。

ちなみに，日本の人格主義は，明治憲法や教育勅語を根幹とする近代天皇制国家の確立期に，ドイツ流の国家主義とイギリス流の個人主義を止揚するものとして，帝大教授など洋学派の教育官僚によって教育理念として唱導されたものです。欧米とは違い日本ではキリスト教的な超越神が排除される傾向が強かったので，結果的に，現世的かつ実用主義的で非個人主義的，間主体的な性格を帯びざるをえなかったと言えましょう。その意味で，和辻哲郎の「人間」概念[10]と，これを方法論的に純化した浜口恵俊の「間人」概念[11]とが，日本における人格の思想の一つの到達点を示唆しているのではないでしょうか。

まず，日本における人格概念の成立過程をみていきましょう。今日，人格という日本語は英語 person （ドイツ語 Person）と英語 personality（ドイツ語 Persoenlichkeit）のいずれの訳語としても用いられます。こうした慣行が成立したのは 19 世紀末以降のことです。それ以前は，person は人，本身，身位，有心者などと，また personality は人トナリ，人ガラ，人タルコト，人品，人物，人性，有心者，霊知有覚，品位，品格，人位，人格などと，様々に訳されていました。佐古純一郎によれば，personality の訳語として人格という用語を「選定」し普及させたのは帝国大学初代倫理学教授の中島力造と，中島の先任の同僚で日本人としては最初の哲学教授であった井上哲次郎でした[12]。

さて，中島によれば，倫理学の課題は人類究竟の目的を明らかにすることですが，古代の倫理学は社会的でありすぎ，また当時の倫理学は個人的でありすぎるから，不十分です。両者を調和させる完全な倫理学を樹立するために，人格について研究しなければならないのです。

中島は終生こうした意見を主張し続けており，日本における倫理学研究の方向と道徳教育の在り方に，決定的とも言える大きな影響を与えました。死を目前にした 1918 年夏の公開講演「最近倫理学説ノ研究」において，中島は当時の倫理学研究の動向と自身の研究生活とを回顧して，次のように述べています。

「此四五年間に於ける一つの新問題は人格問題であります。諸種の実際問題，良心問題，自由意志問題，宗教問題等を研究して見ると，結局，人格問題であります。理論の方面に満足なる結果を得るにも応用の方面に効果を奏するにも道徳は即ち人格活動であるので人格の意義が曖昧であっては意見が一致せぬ，斯ういふことでは所詮満足なる倫理問題の解決は得られぬと考へて，先づ人格は如何なるもので，如何なる風に発達し人生は如何なる意味を有って居るものであるか，此人格問題を十分に研究しなければならぬことに気が付きまして，此四五年間には人格研究に関する著書が中々多く発行になって居ります。之を或学者は心理学的方面より又或学者は哲学上より論究して居る，又宗教の方面より論ずる人もあり，社会学の方面より論ずる人もあります。斯ういふ理由で人格問題を先づ第一に解決しやうとするのが最近の倫理学の傾向で又其問題であります。自分は此問題に満足なる解決が付かぬならば他の倫理問題に確実なる根抵がないと考へ三十年来其処に最大の力を注ぎ，其方面に倫理の根抵を定めたいといふ考えで人格実現説といふ説を唱へて居るのであります。」（中島力造『最近倫理学説ノ研究』（非売品），1919 年２月。原文は旧漢字）。

この文章は短いながらも日本の近代倫理学の根本傾向を精確に要約したもので，三個の論点に整理できます。 ①1910 年代の大正時代になってから人格問題が新しく一大テーマとなり，心理学者，哲学者，宗教学者，社会学者等が競って研究書を

著しているが，人格の意義が明確でないので意見が一致していない。 ②人格の意義を明確にすることで人格問題を解決しようとするのが最近の倫理学の傾向であり，したがって倫理学の第一の課題は，人格とは何か，人格はどのようにして発達するのか，人生の意味とは何か，の三点を解明することにあります。 ③道徳とは人格活動ですから，倫理学によって人格の意義が原理的に明らかになれば，その応用面である道徳の諸問題についても意見の一致が得られ，諸種の実際問題や宗教問題も解決できます。

中島の人格実現説は 20 世紀初頭に形を整えてきますが，その影響の現れが大正期の人格ブームであり人格主義でした。もちろん当時ドイツの思想界を席巻しつつあった，新カント主義者リッケルトらの西南学派の影響も軽んずるわけにはいきません。しかし大正期の人格主義運動は，決して輸入された外発的なものではなく，基本的に内発的だったようです。1890 年に渙発された教育勅語をめぐって，ドイツ流の国家的教育かイギリス流の個人的教育か，と国論が二分し沸騰していた最中に，両者を調停する教育理念として，人格の研究が中島によって開始されたのです。人格の倫理学を新しく確立することで，国家的すぎる，つまり社会的すぎる倫理学と個人的すぎる倫理学の「調和」を図ろうとしたのが，中島に始まる人格実現説だと言えましょう。

ところで，当初 personality の訳語として成立した「人格」の語が，1890 年前後から英語 person やドイツ語 Person の訳語としても用いられるようになりました。personality と person の違いが意識はされていましたが，中島が樹立しようと努力していた哲学的な新しい倫理学の見地からすれば，つまり非宗教的，脱キリスト教神学的観点においては，敢えて区別するほどでもなく，どちらも差し当たり新造の学術用語の「人格」で間に合ったのでしょう。

また，日本語としての「人格」と「人格性」の区別も，現在に至るまで曖昧なままです。その事情については，和辻の以下の注釈が意を尽くしているでしょう。「Mensch を人，Person を人格と訳して区別するのが適当であるか否かは充分問題になる。Person もまた法律学の用語としては『人』と訳されている。『人格』とは人を人としてきめるところのきまり（格），さだめ（格），くらい（格）であるから，むしろ Persoenlichkeit に当たると思われる。・・・人，人格，人格性等の語はドイツ語の Mensch, Person, Persoenlichkeit 等の意味のみを現わすのであり，日本語としての充分な活力は一時停止せられている」[10]。現在の日本の倫理学界の用語法は，ほぼ和辻のこの見解に沿っています。

1889 年に「カント実体論」(Kant's Doctrine of the "Thing-in-itself"，カントの「物自体」論）でエール大学から博士号を得た中島が，その後さらに一年間ドイツとイギリスで研究して，帰国したのは 1890 年３月でした。そして，その年の９月から帝国大学で倫理学の講義を始めました。その直後の 10 月に教育勅語が発布されたのですが，それに合わせて同月に，「利己主義ト利他主義」と題する論文を発表しました（『哲学会雑誌』第四十四号）。その中で中島は概ね次のように述べています。

「人性」には自然に「人位ナルモノ」が備わっており，「人位ハ神聖ナルモノナリ」というのが「倫理学的ノ一大原理」であって，「吾人ハ決シテ他人ヲ自分ノ勝手ニ道具トシテ使用スルノ権ナシ」，また「吾人ハ他人ニ道具トシテ使用サルヽノ義務ナシ」なのです。ところが，このことを利己主義論者も利他主義論者も洞察していません。殊に利他主義の弱点は，「人生最後ノ目的ハ他人ニアルカ如ク論スル」点で，「吾ハ吾カ為メニ存在シ我生涯ハ我目的ヲ仕遂クルアリ」ということを洞察していない点です。

教育勅語をめぐって国家的教育か個人的教育かと議論が沸騰していた当時，十年余り日本を離れていた中島は論争の渦中に深入りせず，議論を純哲学的に立て直し，しかもカント主義者らしく根本原理に基づいて両論を調停しようとしたのでした。試みに「人位」を「人格」ないし「人格性」に置き換えてみるなら，中島の主張の背後に，カントの人格に関する定言命法を容易に察知できるでしょう。

事実，当初の頃より中島は講義のテキストにカントの『人倫の形而上学の基礎づけ』を使用していました。それが英訳本であり，説明の術語がほとんど英語だったことは，1891 年９月に大学に入学した西田幾多郎の一年次試験論文『韓圖倫理學』[13]から明らかです。そこで西田は件の定言命法を，次のように記しています。「Act so as to use humanity whether in your own person or in the

person of another always as an end, never as merely a mean」。これを翻訳すると，「自己の人格と他人の人格とを問はず,決して単に方便とせず,常に目的として人類を取り扱ふ様に行動せよ」となります。ドイツ語原文の理解が英訳本に影響されていたのは疑いありません。

この傾向は，より原文に忠実であろうとした波多野精一訳「自己の人格と他人の人格とを問はず決して単に方便視せず常に同時に目的として人類を取扱ふやうに行動せよ」（「カント倫理學説の大要」）にも，また大西祝訳「人間を汝の人格に於いても又汝以外の者の人格に於いても常に目的として取扱ひ決して唯方便として取扱はざる様に行へ」[14]にも，さらに後年の和辻訳「汝の人格及びあらゆる他の者の人格における人性を，常に同時に目的として取り扱い，決して単に手段としてのみ取り扱わざるように行為せよ」（『カント実践理性批判』）にも一貫しています。

いずれも英訳 use の影響でドイツ語 brauchen を gebrauchen と同一視して「取り扱う」としています。ちなみにこの私，平田は，この両者を区別して,「自分の人格のうちにも他の誰もの人格のうちにもある人間性を，自分がいつでも同時に目的として必要とし， 決してただ手段としてだけ必要としないように, 行為しなさい」と改訳しました[15]。また，再帰的な「自己の」と二人称「汝の」の間で揺れるドイツ語 deiner の訳を，木村敏[16]と浜口恵俊に従って「自分の」としました。

さて，それで，カント自身の原文（アカデミー版全集 IV 429)は次の通りです。

“ Der praktische Imperativ wird also folgender sein: **Handle so, dass du die Menschheit sowohl in deiner Person, als in der Person eines jeden andern jederzeit zugleich als Zweck, niemals bloss als Mittel *brauchst*.**”（ゴチックは原文で隔字体，斜字下線は平田）

利己利他論争において中島は，どちらかと言えば利他主義に軸足をおいていました。それ故，その後英国新カント主義の代表者トーマス・ヒル・グリーンの自我実現説に依拠して自説を展開させる際，グリーンの実用主義的傾向から距離を置こうとして，独自に人格実現説を提唱しました。個人の自由よりも普遍的，社会的な義務を尊重する中島説の特徴は，個人的差異を脱却して理想的な人格を実現しようとする点にあります。それが，やがて道徳教育論としては丁酉倫理会の「人格の修養」論に，また倫理学説としては西田哲学や和辻倫理学へと結実していったのであります[17]。

むすび

本稿で私は「柔らかな開放性」という日本文化の特質を,「哲学」と「人格」という 2 個の現代日本語の成立過程の分析を通じて明らかにしようとしました。

第１節，日本語の多層性―７層性と５層性―において，日本語の開放性について全般的に考察しました。第２節,「理学」からの脱却と「哲学」概念の創出―西周と近代文明―においては，日本における西洋哲学の受容の経緯に着目して，なぜ日本人は伝統的な理学から脱却しようとしたのか，についてその理由を究明しました。そして日本語の異文化への開放性と未来開放性について考察しました。第３節,「人格」概念の創出と近代日本―現代日本の教育理念―では,「人格の完成」という日本の教育の目的と近代日本におけるカント哲学の導入の緊密な関係を明らかにしました。そして，日本語と日本文化の柔らかな開放性について考究しました。

「人格」概念の探求から伺われるように，日本では固定的な核文化が形成されにくいのです。むしろ，最新最強の異文化を基準として伝来の自文化をそのつど柔軟に組み替え，未来に向けて新たに文化を創成し続けていくことが日本文化の特徴となります。外柔内剛で芯があり，未来に向けて一貫した主体性を企投し，したたかに自主性を追い求めるのが柔らかな日本文化なのです。

注

＊本稿は，日韓共同シンポジウム「東アジアにおける西洋哲学受容の問題――日韓人文学の対話の深化を求めて――（韓国・江原大学校人文学部会議室，2011 年 5 月 20－22 日）での発表「カント哲学と日本の教育の目的―日本における西洋哲学の受容と理学からの脱却―」（平田俊博，5 月 21 日第１セッション・研究報告１）を一部書き改めたものです。平成 22 年度～平成 24 年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「日本近代哲学の特質と意義，およびその発信の可能性をめぐって」(研究代表者：藤田正勝・京都大学文学研究科教授)の研究成果の一部です。さらに平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「両大戦間に日

欧の相互交流が日本の哲学の形成・発展に与えた影響をめぐって」(研究代表者：藤田正勝・京都大学文学研究科教授)，および平成19年度～平成21年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「西洋哲学との比較という視座から見た日本哲学の特徴およびその可能性について」(研究代表者：藤田正勝・京都大学文学研究科教授)の，両研究成果も反映しています。

引用・参考文献

1)平田俊博「日本語の七層と現象学的優位　―日本語で哲学する―」(前)，『京都大学大学院文学研究科日本哲学研究室紀要　第2号』，2005年，p. 1-19。

2) 平川祐弘「漢字仮名混じり文の美しさ―理論的考察」，『文藝春秋特別版 美しい日本語』，2002年9月臨時増刊号，p. 170-171。

3)高島俊男『漢字と日本人』，文藝春秋，2001年。

4)石川九楊『二重言語国家・日本』，NHKブックス，1999年。

5)和辻哲郎『続日本精神史研究』，岩波書店『和辻哲郎全集　第四巻』，1962年。

6)佐々木高明『日本文化の多重構造』，小学館，1997年。

7)山口明穂他『日本語の歴史』，東京大学出版会，1997年。

8)平田俊博「道徳と倫理」，『地球システム・倫理学会ニューズレター』No. I，2009年。

9)平田俊博「日本におけるカント哲学の受容と展開」，汎韓哲学会・韓国カント哲学会共編「カント没後200周年記念学術大会」国際シンポジウム『東アジアのカント哲学受容と展望』，韓国・全南大学校、2004年6月11日。

10)和辻哲郎『人格と人類性』，『和辻哲郎全集』第九巻，岩波書店，1977年。

11)浜口恵俊『「日本らしさ」の再発見』，講談社，1988年。

12)佐古純一郎『近代日本思想史における人格観念の成立』，朝文社，1995年。

13)西田幾多郎「『韓圖倫理學』，『西田幾多郎全集』(増補改訂第四版)第13巻，岩波書店，1989年。

14)『大西博士全集』第二巻『倫理学』，警醒社書店，1903年。

15)『カント全集7』(平田俊博訳・解説)『人倫の形而上学の基礎づけ』，岩波書店，2000年。

16)木村敏『人と人との間－精神病理学的日本論』，弘文堂，1980年。

17)平田俊博『増補改訂版　柔らかなカント哲学』，晃洋書房，2001年。

The Flexible Open-door Principle as a Significant Feature of the Japanese Culture: The Acceptance of the European Philosophy and the Purpose of the Modern Education

Toshihiro HIRATA
(Graduate School of Teacher Training, Yamagata University)

The aim of this paper is showing clearly through analysis of the formation process of two current Japanese words 'philosophy' and 'personality' that a significant feature of Japanese culture is 'the flexible open-door principle'. In Section 1 "Multilayer of the Japanese Language: Seven-layers and Five-layers", the flexible open-door principle of the Japanese Language is considered generally. In Section 2 "The Breakaway from the Confician Ideology 'Rigaku' and the Creation of the New 'Philosophy'-concept: Amane NISHI and the Modern Civilization", the open-door principles of the Japanese language to foreign cultures and to the future are considered. In Section 3 "The Creation of the 'Personality'-concept and the Modern Japan: The Current Doctrine of the Japanese Education" are clarified the close relations between the introduction of the Kantianism to the modern Japan and 'the full development of personality' as the purpose of the Japanese public education.